

国文学研究資料館報

第23号

昭和59年9月

共同研究の公募について

棚町 知彌

一、従来の経過

当館の共同研究の経過については、その都度館報にも報告され、また当館の『十年の歩み』にも詳しいが、今回はじめて共同研究課題の公募を行うに当って、その経過を簡単に振り返って見る。

昭和四十七年当館が創立されると、その年早くも館内に「共同利用問題検討委員会」が設けられ共同利用をいかに行うかについて検討が開始された。そして建物が完成し、昭和五十二年に当館が開館し、資料の共同利用が始まるのと時期を同じくして、共同研究も開始され、翌年、館外委員を含む共同研究委員会も正式に発足した。国文学分野の共同研究については、既に館報19号に松崎仁委員が

書かれているが、まず国文学研究資料館で行うにふさわしいものとして、解題研究がとり上げられ、写本、版本の解題研究のテストケースとして、方法の検討を重ねた後、それぞれ初雁文庫、および酒田市光丘文庫俳書の解題が行われ、いずれも既に報告書が出版されている。

解題研究としては、これらに続いて、逸翁美術館蔵国文学関係資料、および故久松潜一博士の当館寄託本についての共同研究が現在進行中である。

当館で行うにふさわしい共同研究の他の一つの例として、当館のコンピュータ利用が考えられ、昭和五十七年度から連歌資料のコンピュータ処理を行うことになり、

次一	共同研究の公募について……棚町 知彌……1
目	文学における「向う側」について…… 鶴田 欣也……3
	『国文学研究文庫目録』の完成……百川 敬仁……4
	海外研究情報誌の収集…… 7
	情報検索システムの利用…… 5
	評議員・運営協議員・委員等名簿…… 8

	文献資料部事業報告…… 福田 秀一……10
	文庫紹介④…… 11
	研究情報部事業報告…… 棚町 知彌……11
	整理閲覧部事業報告…… 本田 康雄……12
	人事異動等…… 14
	利用者へのお知らせ…… 15
	昭和五十九年度秋季学会開催一覽…… 16

これについては、はじめて共同研究員の公募を行なった。

また、当館が毎年海外から迎える外国人研究員を中心とする研究会も、当館の共同研究にふさわしいものとして、同じく昭和五十七年から「日本文学の特質」という包括的テーマのもとに、毎年サブテーマを決めて実施している。

二、テーマの公募について

共同研究のプロジェクトを公募するのは今回が最初であるが、以上の経過にも窺われるように、当館は決して閉鎖的に研究を行おうとしてきたのではなく、着実に段階を追って進めてきたのである。

自然科学系の共同利用機関が早くから共同研究を公募によって進めてきたのに比べればスローテンポのようにも見えるが、それには理由があるのであって、共同研究の実を挙げってきた点を要約すれば、(1)館の収集した文献資料のマイクロフィルムや研究情報は、研究

者の共同利用に供され自由に研究されていること。

(2)文献資料の調査には、毎年調査員として八十名前後の各地の研究者の協力を得ており、館の収集事業がそのまま文献資料の共同調査研究ともなっていること。

(3)これまでの共同研究も、館外委員を通じて、十分館外の意見を反映させて実施されていること。

(4)館の文献資料等の蓄積が、全体から見れば、まだまだ十分でないこと。

(5)国文学の研究は全国各大学等で行われており、高エネルギー物理学研究所、極地研究所、宇宙科学研究所などのように、当該機関でしか行えないという種類の研究ではないこと。

(6)当初は特に事業を進めるために解決せねばならない問題が多く、館内スタッフの共同研究参加の余力に制約があったこと。

(7) 予算がきわめて制約されたものであること。
などである。

こうした条件の中でも当館は、前述のように共同研究を広くオープンな形で進める方向へ着実に段階を追って進めてきたのであって、今日も、制約要因が根本的に変わったわけではないが、ようやく公募の段階に達したという判断のもとに、今回共同研究プロジェクトの公募に踏み切ることとした次第である。今後は、予算の確保などにもさらに努力してゆかねばならないと考えている。

三、現在実施中の共同研究

応募の手続き等については、本館報にも要項が添付され、別途各機関にもお知らせしてあるので省略するが、応募される方の参考にもなると思われるので、現在実施中の共同研究について、その概略を報告する。

(1) 「逸翁美術館蔵国文学関係資料」の解題研究

逸翁美術館(池田市)が所蔵する国文学関係資料の写本・奈良絵本・古筆切のほか、従来あまり顧みられなかった俳諧関係の懐紙・色紙・短冊・屏風等の隣

接分野をも含めて、網羅的に調査研究を行うことを目的として昭和57年度より実施している。

なお、中古・中世の作品についての研究は、当プロジェクトに先立つ科学研究費補助金で実施した研究(昭和55年度・昭和56年度)を引き継いでいる。

昭和58年度までに俳諧関係の一部を除いて調査研究は概ね完了したので、昭和59年度は俳諧関係等残りの調査研究を完了させ、本研究の成果を共同研究報告としてとりまとめる予定である。(昭和59年度継続)

(2) 「久松本」の解題研究

当館にその主要なものが寄託されている故久松潜一博士蔵書の解題研究を昭和54年度から実施している。昭和57年度・昭和58年度は都合により休止したが、昭和59年度は第一次・第二次寄託本(130点)のうち、複製本等を除いて、写本・刊本の126点の解題を完了し、それを編集するとともに、非寄託本についても簡単な目録を作成する予定である。

(3) 「連歌資料のコンピュータ処理」の研究

(昭和59年度再開)

連衆名などを省略しない連歌作品年表をデータベース化し、索引を作成することは可能か、という試行研究を、当館蔵の連歌資料並びに国立国会図書館蔵連歌合集を対象として昭和57年度から実施している。

昭和57年度・昭和58年度には、全メンバーの討議により、目録作成のフォーマットの策定、システム設計のサンプルデータとした国立国会図書館蔵連歌合集のカード化(約1400例)を完了し、情報処理室によるシステム設計(入力部)の開発をまっけてカードのパンチ・入力・校正段階に入った。

昭和59年度には、国立国会図書館蔵連歌合集データの校正と並行して、当館蔵連歌資料のカード化(約1300例の予定)・パンチ・入力・校正を進めつつ、情報処理室が開発するシステムにより、目録と索引の作成を行う予定である。

(4) 「日本文学における『向う側』」の研究

(昭和59年度継続)
昭和58年度外国人研究員(客員教授)として来館されたキン

ヤ・ツルタ教授(ブリティッシュ・コロンビア大学)を中心として、日本文学のイマジナリ世界が外国文学のそれと異なることを中心として共同研究を行った。キンヤ・ツルタ教授は9月に任期を終了して帰国されたが、共同研究は継続し、昭和59年度前半に最終的な研究会を行い、本研究の成果を共同研究報告としてとりまとめる予定である。なお、この研究は「日本文学の特質」という長期の研究テーマの一部であり、(5)もまたその一環のものとして位置づけられている。

(5) 「江戸文学におけるユーモア」の研究

昭和59年度外国人研究員として来館されるハワード・スコット・ヒベット教授(ハーバード大学)を中心に、散文・韻文・演劇等の江戸文学の各分野にわたって館内外の研究者が、標記の研究テーマで研究を進め、研究発表・共同討議を重ねて研究を深めることを目的として実施する。本研究の成果は共同研究報告としてとりまとめる予定である。

(共同研究委員会委員長)

共同研究

文学における「向う側」について

鶴田 欣也

まず日本文学における向う側とは何であるかを説明してみたい。私は北米で二十年ほど近代日本の小説を翻訳を通して教えてきた。あるとき妙なことが気になった。

西洋の近代小説だと主人公の成長過程がなんらかの形で描かれているものなのであるが、日本近代の小説で人間形成のプロセスを書き込んであるのは稀なのである。「暗夜行路」、「伸子」、「人間の運命」等が日本の教養小説ということになっているのだが、「暗夜行路」を除いてあまり芸術的香りの高い作品とはいえない。「暗夜行路」の主人公は最終段階では自然の中に退行するので、近代市民としての成長があったともいいがたい。むしろ、日本文学の土壌に豊かに残っていた抒情性のためか、芸術的に成功した近代日本の小説には主人公の退行が顕著に認められる。北米の学生は退行や母体回帰を逃避、責任回避として倫理的な判断を下すので、それが作品鑑賞のための大きな障害となることがしばしばあ

る。ひとつにはその過程でかもしだされる抒情性に問題がある。詩における抒情性はまだしも、小説という容器に盛られた抒情性に彼等は途惑いを示す。リルケ・ジイド・ウルフ等の例を挙げても、読んでいない場合が多く、あまり役に立たない。

そこで主人公の成長ではなく、退行の旅の意味をさぐるため、そういうテーマをはっきりと持つ作品を選び出して研究してみようと思った。その際主人公の願望が自由に満たされるため、日常空間から離れた特殊空間を設定し、そこに主人公が旅をするという形態をとる作品に限定してみると、次の作品がそれに一応あてはまった。

- (一) 幸田露伴「對鶴樓」 一八九〇
- (二) 泉鏡花「高野聖」 一九〇〇
- (三) 夏目漱石「草枕」 一九〇六
- (四) 芥川龍之介「素戔嗚尊」一九二〇
- (五) 谷崎潤一郎「蘆刈」 一九三二
- (六) 川端康成「雪国」一九三五—四八
- (七) 太宰治「お伽草紙」浦島さん」一九四五

- (八) 安部公房「砂の女」 一九六二
- (九) 古井由吉「聖」 一九七五

これらの作品に特徴がいくつある。まず、主人公が都会からのインテリであること、彼等が迷い込む非日常空間が森、山里、砂丘であること、そこに女性が居ること、主人公が女と何らかの接触を持ち、彼の人生に大きな変化をもたらすこと等である。その空間に行きつくまでの道行も重要である。それから、女の属性には一貫してケア・テイカー（世話する者）、セクシュアリテイ（娼婦性）、ミステリー（神秘性）等がある。主人公には個我の溶解が見られ、それは瞬間的なものから、ある一定期間に亙るものまである。女が触発し、女が支配する自然にその溶解が向けられる場合もある。以上が向う側の小説の特徴である。

極めて芸術的香りの高い作品をいくつか含む向う側の作品は、私の調べた限りでは、日本近代文学に特有なものである。桃源境文学ともユートピア文学ともある部分は重なってもかなり違う。日本文学の古典にも向う側文学の要素はあっても、はっきりとした母体はないように思える。これは自我の

近代化によって日本の土壌に育かれた「モラトリアム」の文学ではないかと思われる。市民的責任遂行のきびしい労働の時間にたいする夢の時間、願望の空間を扱った文学である。

当館における共同研究は当館より五名、外部より三名計八名のメンバーで行なわれた。研究は私の向う側というテーマをたたき台にして、こちら側対向う側という対立空間概念を含むテーマをそれぞれ分野から提起し、この概念に色々な光を当ててみることを試みた。

研究発表及び討議は五回に亙り、かなり白熱した意見の交換が行なわれた。私にとつては貴重な経験であり、これからの研究に生かしていきたいと思っている。いづれ近い将来に私の研究を上梓したいと思っているが、共同研究の方は各自メンバーの研究が「文学における「向う側」として一冊にまとめられ出版される予定である。内容を示すと次の通りである。

- 「向う側」の文学 鶴田欣也
- 異界のトポロジー 百川敬仁
- 説話から見た他界 徳江元正
- 東と西の「桃源郷」—ハーンの再話「孟沂の話」を手がかりとして—

桃源郷のトボス 芳賀 徹
 異貌の「母」の領域―伊豆の踊子― 奥出 健
 「雪国」論― 山中光一
 日本近代文学における「向う側」の成立条件 山中光一
 西洋文学の「向う側」 鶴田欣也

これを機会に共同研究に時間を割いて下さったメンバーの皆様に

『国文学研究文献目録』の完成

百川 敬仁

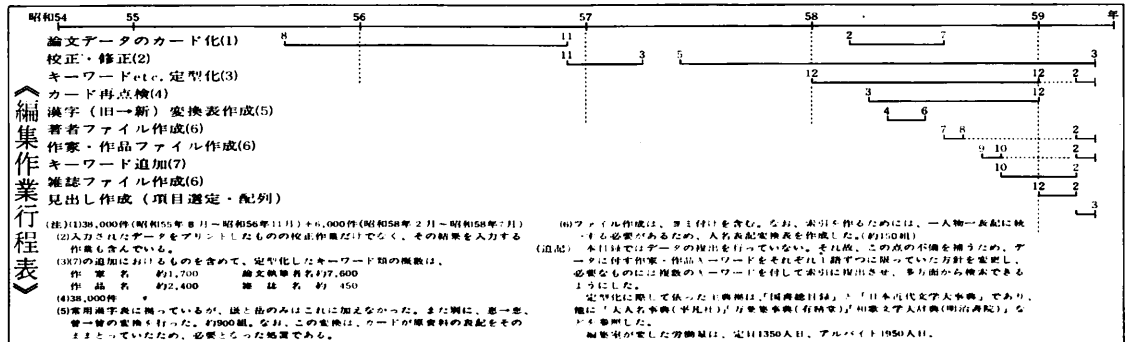
御礼申し上げたい。また山中光一教授はじめ国文学研究資料館の運営面での献身的努力がなかったら、この共同研究はこれほどまでに成功しなかったであろうと思われる。ここに重ねて御礼申し上げます。(ブリティッシュ・コロンビア大学 学教授)

コンピュータを利用した『国文学研究文献目録』昭和16年―昭和37年―の作成作業は、五ヶ年に亘る臨時事業として昭和五四年から始められ、昭和五九年三月をもって終了いたしました。目録化の対象となる館蔵雑誌を充実させるために、研究情報部情報室が雑誌の所在を調査し、それにもとずいて整理閲覧部整理閲覧室が収集する一方で、研究情報部編集室が論文データを探りながら目録に仕上げて行ったのですが、この間、研究情報部情報処理室が、システムの設計・運用・維持を担当しました。各室とも、それぞれ従来の業務をかかえながらこの臨時

最後の約一年は教官四名と事務補佐二名の臨時編成を行いました。作業は、まず原資料となる個々の雑誌を実際に披見して研究文献に関するデータを収集する事に始まり、このデータを外注によって磁気記録のかたちへ変換させたのち、編集室の手で校正・修正をほどこして最終的に目録へ仕上げる、という順序でおこなわれました。少し具体的に申しますと、最初の三年間で約三万八千件のデータを収集致しました(ただしこの時点では、収録の対象とする期間を広く見積っていましたので、あとで目録への出力を見合わせたデータ約八千件を含んでいます)。そして残りの二年間で、ひきつづき約六千件のデータを更に追加するとともに、それ以前に収集した分も雑誌にあたって点検し直ししながらすべてのデータに互ってキーワード定型化の処置をほどこしました。本目録の場合、主なキーワードは論文が扱っている文学作品とその作者の名称なのですが、このほか論文執筆者名、雑誌名などにも定型化が必要です。言う迄もありませんが、コンピュータを利用した目録作成では、こうした定型化が、

事業に携った訳ですが、定員の増加は不可能でしたので、アルバイトの助力は得たものの、かなり忙しい五年間でした。以下、目録の編集を担当した編集室の組織と、作業の経過について、簡単に報告します。

『国文学年鑑』の作成を本務とする編集室の構成は教官二名と事務補佐一名ですが、事業の第四年度から、スタッフが交替しています。また、作業が進行するにつれて、アルバイトに委託できない性質の仕事が増加してきたため―能力の問題もさることながら、アルバイトによって責任分担の体制を組織することが困難であるため―



データを時代・ジャンル・作家・作品の別に分類配列し、論文執筆者に並べ、また、諸種の索引を作るための、前提条件となります。この作業は煩雑をきわめ、結果的に目録の内容を吟味する時間を奪った感がありました。が、さいわい文献目録委員会の諸氏の御協力によって、事なきを得た次第です。

海外研究情報の収集

情報室

作成を終了したところで反省してみますと、やはり、まず少数のデータを使得って作業の全行程を経験してみた上で、仕事に取りかかるべきだったと思われまします。なお、作業経過の概略を図式にして付しておきましたので、何かの御参考にでもなれば幸いです。

(編集室長)

和十六年(昭和三十七年)なのである。

以上これまでの経過をたどって、研究情報収集の今後を考えると、これからは当初構想にもあった「国際情報部」的な方向へも視野を広げて行くことが、次への一つの方向ではないかと考えられる。

もちろん当館はこれまでも海外の研究情報を全く無視して来たわけではなく、国文学研究の情報センターとして、様々な機会に収集することを心掛けて来た。ここにその概要を報告し、今後一層の充実が図れるよう、各方面からの御教示と御協力をお願いする次第である。

研究文献に関する目録の利用

最近では外国語で書かれた日本関係の図書も多くなり、それらについての目録もいくつかが作成されている。関西外国語大学図書館の藤津滋生氏のまとめられた「日本関係欧文参考図書目録付雑誌目録」によれば、文学関係文献の目録やガイドだけでも二十七が数えられている。それらの中で英文の文献だけに限られてはいるが、最も総合的なのは北九州大学吉崎泰博氏による「Studies in Japanese

Literature and Language—A Bibliography of English Materials」(日外アソシエーツ株式会社、昭和五十四年)であると思われるが、そこには文学関係だけでなく、

特定作家・作品に関するもの
九〇七件

その他ドラマ・比較文学など
九〇七件

図書 五五五件
論文 八八一件

が挙げられている。もちろんこの後も研究文献は増加し続けているであろうし、当然英文以外のものもある。たとえば香港の中文大学出版社の実藤恵秀氏監修の「中国訳日本書綜合目録」(一九八〇年)には文学関係六二二件が載せられている。世界のそのような情報全体を把握することはなかなか容易なことではない。

去る一九八三年九月、東京と京都で国際東洋学会議(CISHAN) (館報22号参照) が開られ、また今年五月には東京で第十七回国際PEN会議が開られた。こうした際、大手の書店等が日本に関する欧文出版物の展示会を行った。これらの目録も当然研究文献についての情報の一つである。データベースによる検索

研究情報収集の今後

国文学研究資料館の「十年の歩み」によれば、当初、日本学術会議で当館の構想が練られた時には、今の研究情報部のほかに、もう一つ「国際情報部」を設けることが含まれていたそうである。しかし現実には当館が発足した時には、今の整理閲覧部をも兼ねた研究情報部は、何はにおいても必須の学会誌、雑誌、紀要等を収集し、整理し、目録を作成して開館のサービス開始に備える必要があり、その作業を第一歩から始めることで、ほとんど忙殺される状況であった。それでも逐次刊行物は、文献資

料の場合と異り、一度軌道に乗れば、収集に関する限りは毎号或る程度自動的に累積されて来る。所がそうなるに次には当然、当館創立以前のバックナンバーの収集が緊急の課題となつて来た。そこで研究情報部と整理閲覧部が協力し、既刊の「国文学研究文献目録」所載の昭和三十八年以降のバックナンバーを収集すると共に、「国文学研究文献目録」の刊行されていない昭和三十七年以前の研究文献の調査と収集にも努力して来た。こうして収集された研究文献の目録が、今回別項に編集室から報告されている「国文学研究文献目録」昭

情報を得る有力な方法の一つはデータベースによる情報検索である。当館は数年来、財団法人アジア経済研究所の行っている米図書館図書館の機械可読目録(LC/MARC)からのSDI (Selected Dissemination of Information) サービスにより日本文学関係の図書情報を受けている。これは毎週一回、新収図書の情報が追加される毎に、磁気テープから予め登録したキーによって選択された情報を抽出して送って来るもので、当館では、十進分類、LC分類、および主題で日本文学関係を選択している。米国会図書館は米国内のものに限らず、海外の外国語の図書も集蓄しているの、或る程度は諸外国の情報もこれから得られる。最近では日本の図書もかなり含まれており、当館が寄贈したのも該当する情報として提供されて来る。昨年一年間に検索されたものの内、日本語のものを除き、当館の要求に適合するものは四十件、内古典文学関係十一件であった。

以上は図書についてであるが、雑誌論文、学位論文についてもデータベース検索の利用が可能である。当館では三年前、米国(SI)In-

stitute for Scientific Information) の ASCA (Automatic Subject Citation Alert) システムにより、データベース「SOCIAL SCISEARCH」(社会となつているが文科系をかなり広くカバーしており、上智大学の「Monumenta Nipponica」や、日本文学に関する論文や書評がよく出る「Journal of Asian Studies」なども含まれている) のSDIサービスをテスト的に利用してみた。適確に検索することはむづかしいが、幾通り

か試みた限りでは、幾つかの代表的な雑誌でかなりカバーされることが判った。それらを参考にして現在当館では表1の雑誌が入手されている。

国際電々の国際コンピュータアクセスサービスICASにより米国のTELENETに繋ぎ、ロッキード社の情報検索サービスDIALOGを呼んで、当館の端末から直接オンラインで米国のデータベースを検索することも試みた。前記SOCIAL SCISECH を選んでGEN-

表1 当館蔵欧文または海外機関の日本文学関係雑誌

(継続中のもののみ、Newsletterは除く、詳しくは当館蔵逐次刊行物目録参照)

Acta Asiatica : Bulletin of the Institute of Eastern Culture (東方学会)

Doctoral Dissertations on Asia : an annotated bibliographical journal of current international research (Association for Asian Studies)

Estudos Japanese (Univ. de São Paulo, Centro de Estudos Japanese)

Il Giappone (Istituto Italiano Medio Estremo Oriente)

Harvard Journal of Asiatic Studies (Harvard-Yenching Institute)

The Journal of Asian Studies (Association for Asian Studies)

Kagami : Japanischer Zeitschriftenspiegel (Gesellschaft für Natur und Völkerkunde Ostasiens)

Monumenta Nipponica (Sophia University)

Transactions of the Internatinal Conference of Orientalists in Japan (東方学会)

アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター紀要

国際日本文学研究会集會会談録 (国文学研究資料館)

東方学 (東方学会)

日本学報 (韓国日本学会)

日本文学 (東北師範大学外国問題研究所)

II を検索すると SEIDENSTIC KER 氏の「GENJI DAYS」の書評など8件が、太平洋を越えて瞬時に打ち出されて来た。また MLA (Modern Language Association のデータベース) では、やはり GENJI で日本語の論文など十六件が検索された。

海外の情報を得るまた別の方法は、国内の論文中で海外情報を紹介したものを探すことである。キーワード付加がまだ必しも十分でないで現在なおテスト中であるが、当館の論文データベースには、昭和46年から55年まで十年間の「国文学研究文献目録/国文学年鑑」の論文五三、五六三件が蓄積されている。これに対し、

「翻訳」の前方/後方一致	82件
「海外」の前方/後方一致	31件
「外国」の前方/後方一致	28件
「欧文」の前方/後方一致	15件

等が検索され、たとえばその中から武田勝彦氏の「現地ルポ海外の日本研究」シリーズや下立強氏の「新中国における三十年來の日本文学の翻訳・研究の状況」等海外の研究情報を知らるのに参考となるものを容易に拾い出すことができる。

海外研究者との連絡

当館は昭和五十二年のドナルド・

キーン氏以来毎年外国人研究員を客員として迎えており、それぞれの国の研究状況などについてお話を伺う機会を持っている。またその他にも来館された方と懇談会などを行って研究情報の交換を行っている。館報5号西ドイツ、16号フランス、17号ソ連、18号中国、オーストラリア、19号米国、21号韓国はそれらの報告である。韓国の『日文学報』、中国の『日文学』などの雑誌の交換も、こうした連絡によって実現された。このほかもちろん当館から派遣された在外研究員からも情報を得ており、その都度館報にも記事を掲載して来た。さらに当館は、同じく昭和五十二年から毎年国際日本文学研究集会を開催し、七回までに参加された海外の研究者は、既に一二〇名に達している。研究集会における発表は会議録の形で研究情報の一つとして各方面に配布しているし、またこれら参加者から論文等を送っていたものもある。このほか昭和五十七年には海外一七八機関の二六八名の方々に発表論文等をお知らせ願っている。

おわりに

以上のほか新聞情報収集の際、

海外の記事も採っているが、これを本格的にするには英字新聞、外国新聞まで目を通さねばならず、今そこまでの余裕はない。海外における日本研究も次第に広く深くなってきたり、一昨年はインディアナ大学で『源氏物語』だけの専門的国際会議（館報21号）が開かれたし、昨年は東洋学全体を含むわめて総合的なCUSHMANが行なわれ、今年には作家を中心とした国際PEN大会、そして来年は第四回のヨーロッパ・日本学会議(E A J S)がパリで開かれるが、当館のユニークな立場を考えれば、今後研究情報が国際間でもできるだけ有効に交換され、学界に寄与するようにすることが望ましいと考えられる。しかしこうした海外の研究情報の全体を把握することはなかなか困難なことであり、またそれを必要とする方々に利用して戴くためにも多くの工夫が必要であろう。以上述べてきた現状はまだまだわけて不十分であるので、今後さらに一層努力をして参りたいが、各方面からの御協力も重ねてお願い申し上げる次第である。

(山中光一)

科学研究費(試験研究)報告

情報検索システムの共同利用

文部省科学研究費による試験研究(1)「国文学情報検索システムの共同利用に関する研究—公衆網漢字TSSによる開発—」は、昭和

57-58年度の2年間にわたり実施された。本研究は、国文学研究資料館のメンバーに加えて、館外の国文学、情報学、図書館学の専門家の参加を得て実施されたものである。

- ① ユーザインタフェースを改善した情報検索システムの稼働
- ② データベースの試験的開発と改善
- ③ 公衆網一回線の設置と、遠隔地からの試験的論文検索・利用の実験
- ④ 端末の導入と、JIS第2水準端末の構成
- ⑤ 試験的デモンストレーションを通しての利用者による評価
- ⑥ 外字出現の測定と評価
- ⑦ サービス開発に先立つ諸要因の洗い出し

等である。研究計画の立案時には、予想で

きなかった作業項目も多々あり、いわゆる公開サービスに至るには未だ研究と開発を要する諸問題も少なくない。

しかし、本プロジェクトの主な成果は、上記7項目に加えて、データベース作成の作業手順と作業量の複雑さ、並らびに規模の大きさに対する認識を深めることができたこと、さらに、館外の研究者の協力を通じてメンバー相互の理解を深めたこと、これにより国文学分野の研究資料・研究情報への要求について、試験研究にふさわしく実証的に問題認識ができたことなどがある。

これらの研究成果については、すでに昭和59年3月に報告書としてまとめられているので、詳しくは報告書を参照されたい。

さいごに、

館外研究者の協力に謝意を表するとともに、館外メンバーの各地域でのデモンストレーションに参加していただいた多くの方々にも併せて謝意を表するものである。

(文責安永尚志)

国文学研究資料館評議員名簿

- 任期 昭和59年7月1日、昭和61年6月30日
- 阿部秋生 実践女子大学文学部教授 東京大学名誉教授
 - 伊地知鐵男 元早稲田大学文学部教授
 - 白田甚五郎 国学院大学文学部教授
 - 小田切進 立教大学文学部教授 日本近代文学館理事長
 - 加藤周一 上智大学外国語学部教授
 - 久曾神昇 愛知大学名誉教授
 - 児玉幸多 学習院大学名誉教授
 - 齋藤正 前東京国立博物館長
 - 阪倉篤義 甲南女子大学文学部教授 京都大学名誉教授
 - 佐藤喜代治 フェリス学院大学文学部教授 東北大学名誉教授
 - 谷山茂 大阪市立大学名誉教授 京都女子大学名誉教授
 - 土田直鑑 国立歴史民俗博物館長
 - 坪井清足 奈良国立文化財研究所長
 - 中井信彦 慶應義塾大学名誉教授
 - 橋本不美男 早稲田大学文学部教授
 - 林大 国立国語研究所名誉所員
 - 古島敏雄 東京大学名誉教授
 - 松田智雄 東京大学名誉教授
 - 宮川満 羽衣学園短期大学長 大阪教育大学名誉教授
 - 山本達郎 東京大学名誉教授
- 任期 昭和59年8月1日、昭和61年7月31日
- 秋山虔 東京女子大学文学部教授
 - 有吉保 日本大学文学部教授
 - 今井源衛 梅光女学院大学文学部教授
 - 小林清治 福島大学教育学部教授
 - 小山弘志 国文学研究資料館長
 - 佐竹昭廣 国文学研究資料館教授
 - 神保五彌 早稲田大学文学部教授
 - 棚町知彌 国文学研究資料館研究情報部長
 - 長谷川強 国文学研究資料館文献資料部教授
 - 秀村選三 九州大学経済学部教授
 - 尾藤正英 千葉大学文学部教授
 - 福田秀一 国文学研究資料館文献資料部長
 - 藤村潤一郎 国文学研究資料館史料館教授

国文学研究資料館運営協議員名簿

- 本田康雄 国文学研究資料館整理閲覧部長
 - 松本隆信 慶應義塾大学附屬研究所斯道文庫長
 - 水谷静夫 東京女子大学文学部教授
 - 森安彦 国文学研究資料館史料館教授
 - 安澤秀一 国文学研究資料館研究情報部教授
 - 山中光一 国文学研究資料館研究情報部教授
 - 渡邊守邦 国文学研究資料館文献資料部教授
 - 国文学文献資料収集計画委員会委員
- 任期 昭和59年4月1日、昭和60年3月31日
- 有吉保 日本大学文学部教授
 - 石田稔二 東洋大学文学部教授
 - 大内初夫 鹿児島大学教養部教授
 - 菊田茂男 東北大学文学部教授
 - 鈴木一雄 明治大学文学部教授
 - 鈴木重三 大阪女子大学文学部教授
 - 土田衛 大阪女子大学文学部教授
 - 鳥居フミ子 東京女子大学文学部教授
 - 永井義憲 大妻女子大学文学部教授
 - 室木彌太郎 仁愛女子短期大学教授
 - 文獻目録委員会委員
- 任期 昭和59年4月1日、昭和60年3月31日
- 遠藤宏 成蹊大学文学部教授
 - 大矢武師 東京家政学院短期大学教授
 - 久保田淳 東京大学文学部教授
 - 小島孝之 立教大学文学部助教
 - 坂梨隆三 東京学芸大学教育学部教授
 - 滝藤満義 横浜国立大学教育学部助教
 - 浜野卓也 山口女子大学文学部教授
 - 原道生 明治大学文学部教授
 - 吉田熙生 大妻女子大学文学部教授
 - 情報検索委員会委員
- 任期 昭和59年4月1日、昭和60年3月31日
- 石田晴久 東京大学大型計算機センター教授
 - 稲岡耕二 東京大学教養学部教授
 - 杉田繁治 国立民族学博物館第5研究部助教
 - 照井武彦 国立歴史民俗博物館情報資料研究部教授
 - 西村恕彦 東京農工大学工学部教授
 - 濱田啓介 京都大学教養部教授

- 星野聰 図書館情報大学図書館情報学部教授
 - 堀内秀晃 青山学院大学文学部教授
 - 水谷静夫 東京女子大学文学部教授
 - 国文学文献資料調査員
- 任期 昭和59年4月1日、昭和60年3月31日
- (北海道・東北)
- 金沢規雄 東北大学教養部教授
 - 片野達郎 宮城教育大学教育学部教授
 - 菊地仁 山形大学文学部助教
 - 篠原進 弘前学院大学文学部助教
 - 寺島恒世 山形大学教育学部講師
 - 原山貞義 若手大学教育学部教授
 - 丸山茂 弘前学院大学文学部教授

(関東)

- 石川了 大妻女子大学文学部講師
 - 板坂則子 群馬大学教育学部助教
 - 市古夏生 百合女子大学文学部助教
 - 揖斐高 成蹊大学文学部助教
 - 宇田敏彦 戸板女子短期大学助教
 - 大岡賢典 流通経済大学経済学部助教
 - 表章 法政大学文学部教授
 - 片桐登 法政大学教養部教授
 - 鎌倉恵子 明治薬科大学講師(非)
 - 猿田知之 茨城キリスト教短期大学教授
 - 高田信敬 鶴見大学文学部講師
 - 武井和夫 埼玉大学教養部助教
 - 竹本幹夫 実践女子大学文学部助教
 - 多田一臣 千葉大学文学部助教
 - 棚橋正博 帝京大学文学部講師
 - 塚田晃信 東洋大学短期大学助教
 - 寺澤行忠 慶應義塾大学経済学部教授
 - 外村南都子 百合女子大学文学部教授
 - 長島弘明 実践女子大学文学部講師
 - 牧野和夫 東横学園女子短期大学助教
 - 和田博通 山梨大学教育学部助教
- (中部)
- 青山克彌 金沢女子短期大学教授
 - 赤瀬信吾 愛知県立大学文学部助教
 - 稲垣泰一 金城学院大学文学部助教

柏谷 興紀 皇学館大学文学部助教授

木越 治 金沢大学教養部助教授

鈴木孝庸 新潟大学教養部助教授

滝澤貞夫 信州大学教育学部教授

竹村信治 金沢美術工芸大学美術工芸学部講師

長友千代治 愛知県立大学文学部教授

長谷川 端 中央大学文学部教授

森下純昭 岐阜大学教養部助教授

安田文吉 南山大学文学部助教授

矢野賢一 愛知県立女子短期大学助教授

山口 博 富山大学文学部教授

山下宏明 名古屋大学文学部教授

〔近畿〕

新井榮藏 奈良女子大学文学部教授

伊井春樹 大阪大学文学部助教授

石川真弘 大谷女子大学文学部教授

出雲路 修 京都府立大学女子短期大学部助教授

伊藤正義 大阪市立大学文学部助教授

榎本正純 武庫川女子大学文学部助教授

大高洋司 甲南女子大学文学部講師

片岡利博 松蔭女子学院文学部講師

加納重文 京都女子大学文学部助教授

加美 宏 同志社大学文学部教授

楠橋 開 京都外国語大学外国語学部講師

小林健二 大谷女子大学文学部講師

小川賢章 大阪府立大学総合科学部講師

阪口和子 羽衣学園短期大学助教授

島崎 健 京都大学教養部助教授

竹下 豊 大阪女子大学文学部講師

土谷泰敏 大阪教育大学教育学部講師

宇島樵一 甲南大学文学部助教授

長坂成行 奈良大学文学部助教授

橋本直紀 大阪府立淀川工業高等学校教諭

福嶋昭治 岡田学園女子大学文学部助教授

堀口康生 大阪女子大学文学部助教授

和田克司 大阪成蹊女子短期大学教授

〔中国・四国〕

位藤邦生 広島大学文学部助教授

稲葉二柄 香川大学教育学部助教授

田村憲治 愛媛大学法文学部助教授

山口真琴 高知大学人文学部講師

吉山裕樹 比治山女子短期大学助教授

米谷 巖 広島大学文学部助教授

〔九州〕

荒木 尚 熊本大学文学部教授

井上敏幸 福岡女子大学文学部教授

金原 理 熊本大学文学部教授

白石梯三 福岡大学人文学部教授

米倉利昭 佐賀大学教育学部教授

若木太一 長崎大学教養部助教授

国文学文献資料特別調査員

阿部泰郎 (財)元興寺文化財研究所研究員

井上宗雄 立教大学文学部教授

小川幸三 熊本短期大学助教授

金光洋三 大阪女子大学文学部助教授

黒田 彰 関西大学文学部講師(非)

坂田 新 愛知県立女子短期大学助教授

佐藤恒雄 香川大学教育学部教授

佐藤 稔 秋田大学文学部助教授

土井洋一 学習院大学文学部教授

名和 修 (財)陽明文庫主事

西村 聡 金沢大学文学部助手

延廣眞治 東京大学教養学部助教授

服部 仁 同朋大学文学部講師

早川厚一 名古屋大学文学部助教授

古屋 彰 金沢大学文学部助教授

松野陽一 東北大学教養部教授

松原一義 四国女子大学文学部助教授

美山 靖 豊後技術科学大学工学部教授

村上 学 愛媛大学文学部教授

国際日本文学研究会委員会

任期 昭和59年4月1日、昭和60年3月31日

池田 重 青山学院大学文学部教授

白田甚五郎 国学院大学文学部教授

芳賀 徹 東京大学教養学部教授

長谷川 泉 学習院大学講師(非)

ドナルド・キーン コロンビア大学教授

共同研究委員会委員

任期 昭和59年4月1日、昭和60年3月31日

秋山 虔 東京女子大学文学部教授

稲賀敏二 広島大学文学部教授

島津忠夫 大阪大学教養部教授

神保五彌 早稲田大学文学部教授

松崎 仁 立教大学文学部教授

古典籍総合目録委員会

任期 昭和58年4月1日、昭和60年3月31日

乙骨達夫 国立国会図書館蔵書管理部蔵書監

菊地勇次郎 大正大学文学部教授

沙藤隆茂 東京大学附属図書館事務部長

柴田光彦 跡見学園女子大学文学部教授

堤 精二 お茶の水女子大学文学部教授

森川 彰 梅花女子大学文学部教授

共同研究員

任期 昭和59年4月1日、昭和60年3月31日

伊井春樹 大阪大学文学部助教授

高田信敬 鶴見大学文学部講師

清登典子 鶴見大学女子短期大学部講師(非)

久保田 淳 東京大学文学部教授

三輪正胤 大阪府立大学総合科学部助教授

鈴木 淳 国学院大学日本文化研究所講師

岩下紀之 愛知淑徳大学文学部助教授

奥田 勲 宇都宮大学教育学部教授

沢井耐三 愛知大学教養部教授

島津忠夫 帝塚山学院短期大学教授

鶴崎裕雄 大阪大学教養部教授

渡辺憲司 梅光女学院短期大学部助教授

和田道子 愛知教育大学講師(非)

田中隆裕 二松学舎大学大学院博士課程

宮脇眞彦 成城大学大学院博士課程

綿抜豊昭 中央大学大学院博士課程

徳江元正 国学院大学文学部教授

平川祐弘 東京大学教養学部教授

芳賀 徹 東京大学教養学部教授

奥出 健 横浜女子短期大学講師

キンヤ・ツルタ フリテイッシュコロンビア大学教授

任期 昭和59年6月1日、昭和59年7月31日

共同研究員

文献資料部事業報告

福田 秀一

今回は、前々号で改めたスタイルによって、主として事業面別にこの半年間の進展を報告する。
昭和五十八年度国文学文献資料調査・収集結果

前号の報告に追加すべき所蔵者名とそれを加えた昨年度の合計点数は、次の通りである。資料の所蔵者あるいは関係職員各位や調査もしくは収集（撮影）に御協力下さった調査員等の各位に、この場を借りてあつく御礼申上げる。
一、調査

追加される所蔵者名（敬称略）として、北海道東北地区に北海道立図書館（予備調査）・札幌商科大学図書館（同）・江差町郷土資料館（同）、関東地区に個人（東京都練馬区）・学習院大学国語国文学研究室・東京外語大A A 研図書館、中部地区に石川県立図書館（予備調査）・藤枝市立図書館（予備調査）・専光寺（金沢市、同）・大乘寺（同、近畿地区に岡部町教育委員会（予備調査）、中国四国地区に長門市立図書館（予備調査）、益田市立図書館（同）・新南陽市図書館（同）。

錦町公民館（同）、九州地区に九州大学附属図書館（富田文庫、予備調査）、祐徳稲荷神社・普明寺（鹿島市、予備調査）・島原市森岳公民館分館（松平文庫）があつて、国内の合計は六七箇所七八一九点となった。

また海外においても、前号に概略述べた文部省海外学術調査研究費による調査によつて、カリフォルニア大学バークレイ校東亜図書館（三井文庫）三五・六六、米国議会図書館（三井）五五の調査記録を作ることができた。

因みに、予備調査とは所蔵資料の全貌・内容を把握したり、当館としての調査・収集が可能かどうか、可能ならばその時期・方法をどうと直接知るための調査を言い、右に予備調査をしたと記した文庫の中には、その結果に基いて本年度に本調査に入っているものもある。また、東外大A A 研図書館蔵資料とは、同館所蔵マニラ本「スピリツアル修行」（キリキタン版）フィルム（複製）（原本は戦火で焼失）である。

二、収集

前号報告以後のものとしては、

関東地区に宮内庁書陵部、中部地区に富山大学附属図書館（ヘルン文庫）、静岡県立中央図書館・神宮文庫があつて、国内の合計は、既製マイクロフイツシュ購入（静嘉堂文庫と東大図書館霞亭文庫）二箇所を含めて三四箇所五九五四点となった。このほかに海外収集として、ルール大学ボッフム東亜学部図書館とスエーデン王立図書館（ノルデンシヨルドコレクション）の一部とフィルムを入手することができた。前者は幸い所蔵和古書などができたが、後者の方は先方の事情でかなりコスト高になるため中途で一旦打ち切り、二〇リール五〇点を入手した。

昭和五十九年度文献資料調査・収集計画
これについては、例年通り昨秋頃から立案にかかり、昨年十二月及び今年三月の収集計画委員会の検討も終つて、調査に関しては国内で五八箇所七七五五点、収集に関しては同じく国内で三六箇所五一六六点を計画した。そしてその遂行のために本年度も全国六地区で計七八名の調査員を委託して、去る五月に当館で開催した調査員会

議で右の計画を具体的に説明して承認を得、直ちに活動を開始した。調査員の中には、私がこの原稿を書いている今日も、炎暑の中を書誌調査や撮影の立会に、あるいはそれへの往復に、汗を流しておられる方もある筈である。

なお海外資料の調査収集については、国内資料にもまして研究者の要望が強いので、当方としても力を入れたのであるが、今まで折々述べたような予算上の制約や国情の違いによつて、必ずしも期待通りの成果には至らない。

ただ、昨年度に科研費で実施したカリフォルニア大学バークレイ校の三井文庫本の調査に対して、本年度に「調査総括」の予算が認められたので、ある程度の成果を出すべく、目下作業中である。

また、ソウル大学校図書館と並んで学界で関心の持たれている国立台湾大学研究図書館の旧台北帝大蔵書についても、種々の事情から調査収集を急ぐべきであると考えられる。（このことは、昨年来収集計画委員会でも強く指摘されていた）ので、今年度から来年度にかけて、何らかの取り組みをしたと考へ、準備中である。

第四室

今年度の客員には、池田利夫氏（鶴見大学教授）と嶋中道則氏（東北学芸大学助教授、併任）とを迎えている。テーマはそれぞれ平安物語文学の研究と近世和歌文学の研究で、池田氏には当館収集資料を中心とした「源氏物語諸本解題」の試みに、嶋中氏には昨年度の井上氏を受けて、当館の調査収集成果を生かした彰考館の書目の作成に、主として当って頂いている。

第一〜三室

別項にも記されると思うが、本

研究情報部事業報告

棚町 知彌

昭和五十四年度から五カ年計画で進めてきた「国文学研究文献目録（昭和十六年〜昭和三十七年）」が完成したので、この事業の遂行のために設けた臨時編集室の体制は解くこととなったが、将来の研究情報のオンライン・サービス化に対処するため、論文データにキーワードを付加する等の試行に入った。そのため、編集室を強化し、室長のほか情報室の小野尚志助手が参考室に移った後の定員を移して新たに松岡心平助手を迎え、奥

年度は当部正員の九つのポストのうち三つも交代することになり、十年余り勤めた伊井助教授や高田・小林尚助手がそれぞれ新しい勤務校へ転出して、後任には適任気鋭の三名を迎えた。事務引継は怠りなく済ませたと思うが、所蔵者・調査員各位等との連絡において、御不便・御迷惑をかけることを慎み、叱正下さるよう、そしてまた当館に対し相変らぬ御理解と御支援を賜るよう、この機会にお願い申上げる。

（文献資料部長）

出健助手の後任の末澤明子助手と併せて助手二名とした。情報室は部長・室長のほか補佐員だけでやや変則となるが、別項のように今後は外国人研究員等の協力も得て国際的視野を広げて行く方針である。情報処理室は、情報処理関係の堀浩一助手、戸田誠之助助手の二名が後任として加わった。

情報室

研究情報部の編成替えにより情報室は助手の減員となったが、館報の年2回発行、国際日本文学研

文庫紹介④

高知県立図書館「山内文庫」

妻の内助の功の逸話で名高い山内和豊を初代とする土佐藩主山内家伝来の蔵書が山内文庫である。昭和二十一年十一月に二万冊が高知県立図書館に寄託され（一部は寄贈）、昭和四十七年三月に同図書館より「山内文庫目録」が刊行されている（三九二―三九三点）。

蔵書内容は領内の社寺旧家から収集されたものも含まれ、室町時代から明治に至る和書・文書が中心。特に近世の版本が多いが、物語・説話・随筆・歌書・謡曲・俳書・近世小説・漢文学等々、広い分野に及ぶ。中でも鹿持雅澄の自筆稿本『万葉集古義』（文政・天保期）や『長宗我部地検帳』（重文指定）などが著名で、谷秦山ら国学者をはじめ郷土関係の作品資料が充実しているのが特徴である。高

国文学研究資料館では、県立図書館の御協力を得て、昭和五十二年から調査を開始し、撮影収集も昭和五十四年から始め、それぞれ現在も継続中である。昭和五十八年度までに一二五九点を調査し、収集は六三六点に及んでいる。これまで調査に携わって頂いた中国地区の調査員の先生方はのべ十五人に亙る。

尚、県立図書館は山内家ゆかりの高知城内に閑静な一角を占め（日曜休館）、他に長尾・山中家・野見・野中・坂崎・田岡等々の文庫や松本・岡・赤松・公文・大石・三谷家等々の文書が収蔵されている。また山内神社の宝物館にも山内家の古書の一部が所蔵されているとのことで、今後の調査の進展が期待される。

高知県立図書館（山内文庫）

〒780 高知県高知市丸ノ内

一ノ一ノ一〇

研究資料館で簡便に資料が利用できるようになったのは極めて有益であろう（秦山の著は東大・南葵文庫の版本が当館に寄贈されている）。

電話 〇八八八―七二一六三（〇七

）（文献資料部 小峯和明）

究集会の開催は、従来通り担当する。ただ新聞情報については、昭和四十九年以来ちよど十年を迎えたので再検討し、今年からは全国紙だけに限ることとした。従来地方紙六紙、図書専門紙三紙の記事も採録していたが、地方紙を網羅しているわけではなく、記事としては全国紙と重複するものが多いのでこの際止めることとした。今後は海外の情報の方へ今一步視野を広げる方向で努力してゆきたい。

編集室

三月末に『国文学年鑑』昭和五十七年版および『国文学研究文献目録』昭和十六年、昭和三十七年を刊行した。後者は五ヶ年にわたる臨時事業の成果であり、非売品として五百部を印刷、各大学・図書館など公共機関を中心に既に配布を完了している。

当室では四月から、『国文学年鑑』所収の雑誌論文データを機械検索可能とするため、校正およびキーボード付加の試みに着手した。対象となるデータは既往の分で約四万件をかぞえ、更に、毎年約七千件以上が累積されて行く見込みなので、室を再編成し、助手と事務補佐とを一名ずつ増員して作業を進めている。

情報処理室

電子計算機の運用・運転を除く昭和五十八年度事業は、以下のように入力した。

(1) 目録作成

定常的な業務として、

① 国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録(一九八三)(八六五頁、索引部二二六頁)

② 同累積・簡略版(一九八二)

③ 国文学研究資料館蔵和古書目録増加2(一九八三)

④ 国文学研究資料館蔵逐次刊行物目録(一九八四)

の版下作成を行ったほか、五十八年度は特に五カ年計画の臨時事業の最終年として、

⑤ 国文学研究文献目録(昭和十六年、昭和三十七年)(七四八頁、索引一三一頁)

の版下作成を行った。

(2) データ入力等

上記目録用のデータの入力等の運用のほか論文検索用データ付加文字フォントの作成(外字一一一字)を行った。

(3) システム開発

以下のシステム開発を行った。

① 古典籍総合目録作成システム

著作データを蓄積し、コントロールを行うシステムを開発した。

② 昭和三十七年以前論文目録作成システム

版下作成、索引作成のほか校正などを行なうための運用システムを開発した。

③ 論文検索システムの試験運用

昭和四十六年、昭和五十五年分のデータ約五万件の検索システムの試験運用を開始した。

④ 連歌目録作成システム

整理閲覧部事業報告

本田 康雄

当部が担当する業務(資料の受入、整理、保存、利用サービス、及び参考業務、公開講演会の開催、展示等)は、後に具体的に述べるように今期も順調に進展した。

昭和五十八年度から新たに古典作品典拠ファイル作成事業が始まり、当部もデータの作成・入力面でこの事業を分担することとなった。この事業は、すでに当館で作成されつつある各種のデータベース(古典籍総合目録、マイクロ資料目録、和古書目録、著名名典拠ファイル等)と密接に関連して

共同研究班で行っている連歌データの入力システムを開発し、その運用を行った。

(4) その他

昨年十一月導入の新計算機M二六〇Dへのリプレースに伴い、各所に設けた端末に対し、

① 日本語処理システム

② 論文検索システム

③ 古典テキスト索引作成システムのサービスをを行っている。

(研究情報部長)

おり、今回の事業の完成によって当館のデータベースが相互に有機的に関連付けられることになるものと期待している。

古典籍総合目録作成事業は、事業開始後五年目を迎えた。すでに4万件以上の目録データを収集しており、今年度からはその編集作業に仕事の力点を移していくことになると思われる。この事業は、コンピュータ化を大前提として取り組んでおり、現在コンピュータシステムの設計、開発も研究情報部において進行中である。事業全

体としても今後の数年間がいわば大きな山となろう。

なお、四月一日付で小野尚志助手が研究情報部情報室から参考室に配置換となった。また、高島津雪事務官が閲覧係に、大倉加代子事務官が整理係に配置換となった。

(一)整理閲覧室

以下に各業務毎に報告する。

(1)受入業務

昭和五十八年度の受入資料数は、マイクロ資料(ロールフィルム一、二七六リール、紙焼写真本五、四五九冊)、図書(二、九六八冊)、逐次刊行物(継続受入等約一、一〇〇誌)、雑誌製本(四四〇冊)であった。その結果、昭和五十八年度末での全蔵書数は、別表のとおりとなった。

昭和五十九年度も、予算の確定に伴い、例年どおり資料の受入れを行っており、ひきつづき、図書選定小委員会その他の協力を得ながら国文学関連資料の総合的な収集・受入れに努めたい。

(2)古典籍総合目録作成事業

五十八年度中に、約二万件の目録データのパンチを行い、さらに、前年度パンチしたのものも含めて入力前処理を行った。この結果、現

在約二五、〇〇〇件のデータがコンピュータへの入力可能な状態となっている。

(3)整理業務

昨年度に引き続き、昭和五十八年度受入分を中心に収録した「和古書目録増2(一九八三)」を刊行した。書目数一七三三点である。

昭和五十九年度より五年計画で古典作品典拠ファイル作成事業がスタートした。これによって書名(別書名、角書)、著者名、巻冊数、成立年、分類等、古典作品に関する基礎的情報を収録したデータベースを作成する予定である。

マイクロ資料では、「マイクロ資料目録一九八三年」を例年通り刊行した。鹽竈神社他二十五所蔵者の九〇〇八点が収録されている。次の目録用のデータ整理も進み、既に四七〇〇点が入力済みである。

(4)閲覧業務

昭和五十八年度は、入室者数が七、九九三人(一日平均二九人)、利用登録者が二、〇〇三人(一日平均七人)、文献複写が一四、一四〇件(一日平均五一件)で、いずれも前年度を大きく上回った。特に文献複写の伸びは著しく、中でも図書・雑誌の電子複写は、前年

度に比べて二五%増であった。利用者が多い時期は、複写申込件数も多くなり、また申込が午後に集中することもあって、閉館時間までに複写が終らない日が多かった。また、相互利用の申込受付は七四七点であった。

サービステ体制の整備、改善の一環として、五月に逐次刊行物全冊開架の第二次追加、六月にカウンターの整備、書庫内資料配置換作業を実施した。

なお、蔵書点検を例年通り、三月末の一週間にかけて実施した。

(5)マイクロ室業務

大和文華館他三八文庫、一三〇〇リールの作業用ネガフィルムを作成した。閲覧用ポジフィルムは、麗沢大学図書館(田中文庫)他二七文庫の一二〇〇リールを複製し、五十七年度収集分の加工をほぼ終了した。紙焼写真については、五七〇リールの焼付、二二二〇冊の製本、整理を行った。他に当館所蔵和古書の文献複写サービスのための撮影とポジフィルムの複製を行っている。

(二)参考室

日常業務として、参考質問の受付・回答に従事し、参考図書の充

所蔵資料統計(昭和59年3月31日現在)

資料種別		点数	冊(リール)数
マイクロ資料	ロールフィルム	61,554点	13,454リール
	マイクロフィッシュ	3,397点	10,008 枚
	紙焼写真本	35,443点	30,231 冊
図書(古書及び新刊本)		16,609点	56,401 冊
逐次刊行物		2,738誌	64,830巻号冊
寄託図書		118点	154 冊

*この他、紙焼写真による収集(530点)がある。

実と参考開架閲覧室の維持にあたった。

国文学の普及業務として、次のとおり公開講演会・展示を開催した。

●第20回公開講演会(6月9日、於当館)

「研究と創作のあいだ」大岡信氏(明治大学教授)、「わたくしなりのもの学びー日本文学における漢語の表現ー」小島憲之氏(龍谷大学特任教授)

●常設展示

第22回「平安朝物語」(1月17日、3月24日)

第23回「和書のさまさま」(4月23日〜6月23日)

なお、昨夏の第6回夏期公開講演会の筆録集である「日記と文学(国文学研究資料館講演集5)」を刊行し、大学図書館等への寄贈のほか、希望者にも配布している。

(整理閲覧部長)

+++++

評議員会議の開催について

本年度第一回評議員会議が六月一日(金)に当館中会議室において石井議長ほか十三名の出席を得て開催され、館長の任期についての審議並びに教官の停年及び本年四月一日付人事異動等についての報告が行われた。

運営協議員会議の開催について

本年度第一回運営協議員会議が五月二十八日(月)に当館中会議室において小山議長ほか十三名の出席を得て開催され、教官の停年についての審議が行われた。

また、機関の長の任期についての意見交換及び本年四月一日付人事異動等についての報告が行われた。

委員会日誌

昭和59年

5月7日 国際日本文学研究集会委員会(第一回)

5月15日 国文学文献資料収集計画委員会(第一回)

5月18日 共同研究委員会(第一回)

5月22日 国文学文献資料調査員会議(総会)

7月25日 文献目録委員会(第一回)

7月26日 国文学文献資料調査員会議(中国・四国地区)

8月9日 共同研究委員会(第二回)

8月16日 国際日本文学研究集会委員会(第二回)

8月28日 情報検索委員会(第一回)

第二十二回公開講演会

日時 59年10月27日(土)

午後1時30分より

場所 名古屋市中区栄2丁目 長円寺会館ホール

演題および講師

人麻呂の声調 稲岡耕二

撰集の「うた」 後藤重郎

人事異動

(昭和五十九年三月〜昭和五十九年七月)

(採用) 昭和五十九年四月一日付

文部教官 (文献資料部助手) 母利 司朗

文部教官 (研究情報部助手) 堀 浩一

文部教官 (研究情報部助手) 松岡 心平

文部教官 (研究情報部助手) 末澤 明子

文部教官 (研究情報部助手) 戸田誠之助

(昇任) 昭和五十九年四月一日付

文部教官 (文献資料部教授) 渡邊 守邦

(転入) 昭和五十九年四月一日付

文部教官 (史料館教授) 森 安彦 (信州大学より)

文部教官 (文献資料部助教授) 小峯 和明 (徳島大学より)

文部事務官 (管理部会計課長) 古谷 忠司 (大蔵省より)

(転出) 昭和五十九年四月一日付

文部教官 (文献資料部助教授) 伊井 春樹 (大阪大学へ)

文部教官 (研究情報部助教授) 内藤 衛亮 (東京大学へ)

昭和五十九年四月十一日付

文部教官 (研究情報部助教授) 宮澤 彰 (東京大学へ)

昭和五十九年四月一日付

文部事務官 (管理部会計課長) 内山日出男 (統計数理研究所へ)

(辞職) 昭和五十九年三月三十一日付

文部教官 (文献資料部助手) 高田 信敬 (鶴見大学就職)

文部教官 (文献資料部助手) 小林 健二 (大谷女子大学就職)

文部教官 (研究情報部助手) 奥出 健 (横浜女子短期大学就職)

文部教官 (研究情報部助手) 平澤 龍介 (百合女子大学就職)

(客員教授) 昭和五十九年四月一日〜昭和六十年三月三十一日

文献資料部 池田 利夫 (鶴見大学より)

(併任) 昭和五十九年四月一日付

文部教官 (文献資料部助教授) 鳴中 道則 (東京学芸大学より)

利用者へのお知らせ

◆ 逐次刊行物全冊開架を十四誌追加

当館では、閲覧室に全冊開架コーナーを設け、利用頻度の高い雑誌を所蔵分全冊の開架を行っております。昨年度は、全冊開架コーナーの増設(専用書架の増設)を行い、三十五誌を追加しましたが、このたびさらに十四誌を追加いたしました。これによって、全冊開架は、計六十誌となりました。六十誌のタイトルは次のとおりです(五十音順、*印は追加分)。

1 *青須我波良(帝塚山短期大学 日本文芸研究室)

2 *愛媛国文研究(愛媛国語国文学会)

3 解釈(解釈学会)

4 *金沢大学国語国文(金沢大学 国語国文学会)

5 近世文芸(日本近世文学会)

6 近代語研究(近代語学会)

7 軍記と語り物(軍記物談話会)

8 *芸能史研究(芸能史研究会)

9 言語と文芸(大塚国語国文学会)

10 口承文芸研究(日本口承文芸学会)

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------------|--------------|--------------------------|----------------------|-----------------------|-----------------------|------------------|----------------------|------------------|---------------------|---------------------|------------------------|-----------------|----------------|--------------------|-------------------|-----------------|---------------------|----------------|----------------------|------------------|----------------|----------------|--------------------------------|---------------------------|---------------------|-------------------|--------------------|-----------------|----------------------------|-------------------------|--------------------------|-----------------|---------------|----------------|-------------|-------------------|----------------------|------------------|--------------------|--------------------|---------------|-------------|----------------|----------------|----------------------|-------------------------|-----------------|-------------------------|------------------|
| 11 国学院雑誌(国学院大学) 学会) | 12 国語学(国語学会) | 13 国語国文(京都大学文学部国語国文学研究室) | 14 国語国文研究(北海道大学国文学会) | 15 国語と国文学(東京大学国語国文学会) | 16 国文(お茶の水女子大学国語国文学会) | 17 国文学(関西大学国文学会) | 18 国文学・解釈と教材の研究(学燈社) | 19 国文学解釈と鑑賞(至文堂) | 20 国文学研究(早稲田大学国文学会) | 21 国文学攷(広島大学国語国文学会) | 22 *国文目白(日本女子大学国語国文学会) | 23 古事記年報(古事記学会) | 24 古代文学(古代文学会) | 25 *古典と現代(古典と現代の会) | 26 語文(大阪大学国文学研究室) | 27 語文(日本大学国文学会) | 28 語文研究(九州大学国語国文学会) | 29 上代文学(上代文学会) | 30 女子大國文(京都女子大学国文学会) | 31 説話文学研究(説話文学会) | 32 中古文学(中古文学会) | 33 中世文学(中世文学会) | 34 *東京女子大学日本文学(東京女子大学学会日本文学部会) | 35 名古屋大学国語国文(名古屋大学国語国文学会) | 36 日本演劇学会紀要(日本演劇学会) | 37 日本歌謡研究(日本歌謡学会) | 38 日本近代文学(日本近代文学会) | 39 日本文学(日本文学協会) | 40 *日本文学ノート(宮城学院女子大学日本文学会) | 41 日本文学風土学会紀事(日本文学風土学会) | 42 *日本文芸研究(関西学院大学 日本文学会) | 43 *ピアリア(天理図書館) | 44 表現研究(表現学会) | 45 仏教文学(仏教文学会) | 46 文学(岩波書店) | 47 *文学研究(日本文学研究会) | 48 文学・語学(全国大学国語国文学会) | 49 文芸研究(日本文芸研究会) | 50 *文芸と批評(文芸と批評の会) | 51 平安文学研究(平安文学研究会) | 52 別冊国文学(学燈社) | 53 万葉(万葉学会) | 54 *万葉集研究(塙書房) | 55 美夫君志(美夫君志会) | 56 むらさき…研究と教養(紫式部学会) | 57 立教大学日本文学(立教大学 日本文学会) | 58 連歌俳諧研究(俳文学会) | 59 *論究日本文学(立命館大学 日本文学会) | 60 和歌文学研究(和歌文学会) |
|---------------------|--------------|--------------------------|----------------------|-----------------------|-----------------------|------------------|----------------------|------------------|---------------------|---------------------|------------------------|-----------------|----------------|--------------------|-------------------|-----------------|---------------------|----------------|----------------------|------------------|----------------|----------------|--------------------------------|---------------------------|---------------------|-------------------|--------------------|-----------------|----------------------------|-------------------------|--------------------------|-----------------|---------------|----------------|-------------|-------------------|----------------------|------------------|--------------------|--------------------|---------------|-------------|----------------|----------------|----------------------|-------------------------|-----------------|-------------------------|------------------|
- ◆ 文献複写申込受付時間の変更について
- 七月より文献複写申込受付時間が次のように変更になりました。よろしくご協力の程お願いいたします。
- ・ 平日 九時三十分から十五時三十分まで
- ・ 土曜日 九時三十分から十一時三十分まで

昭和五十九年度秋季学会開催一覽

情報室

国語国文学会連絡協議会に参加する学会の秋季大会予定は次のとおりである。学会掲出は五十音順。以下①事務局、②大会開催日、③会場。②③の記入のない学会は大会予定無しか、または大会期日未定。

- 解釈学会 ①下七〇豊島区北大塚三―二九―二教育出版セクタ―内
- 近代語学会 ①下一六〇新宿区北新宿三―一〇―一〇一五〇七
- 国語学会 ①下二〇一千代田区神田錦町三―一武蔵野書院気付
- ②一〇月二〇―二二日③中京大
- 文学部
- 古事記学会 ①下一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学日本文化研究所第三研究室内
- 古代文学会 ①下二一―一川崎市高津区千年三〇五吉田修作方
- 上代文学会 ①下二三〇横浜市鶴見区鶴見一―一三鶴見大学女子短期大学部国文科研究室内
- 説話文学会 ①下一七〇豊島区西単鴨三―二〇―一―大正大学文学部国文学研究室内②十二月二日

- ③椋山女学園大学
- 全国国語国文学会 ①下二〇二千代田区三番町二八―一六グラ―三番町四〇五号桜楓社気付②十一月十七―十九日③甲南女子大学
- 中古文学会 ①下四六三名古屋守山区大森二八二―二金城学院大学国文学(松田)研究室内
- ②一〇月一三―一四日③東北大学文学部
- 中世文学会 ①下二〇二千代田区富士見二―一七―一法政大学能楽研究所内②一〇月二七―二九日③奈良女子大学
- 日本演劇学会 ①下一六〇新宿区西早稲田一―六―一早稲田大学演劇博物館内
- 日本歌謡学会 ①下一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部第五研究室内②十一月一七―一八日③関西学院大学
- 日本近世文学会 ①下一六二新宿区戸山一―二四―一早稲田大学文学部神保五弥研究室内②十一月一七―一八日③南山大学
- 日本近代文学会 ①下二二文京区目白台二―一八―一日本女子大学文学部国文学科研究室内②一〇月二七―二八日③実践女子大学講堂

- 日本口承文芸学会 ①下一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部第五研究室内
- 日本文学協会 ①下一七〇豊島区東池袋二―一九―二第二八千代マンション二〇二号②一〇月六―七日③宮城学院女子大学
- 日本文学風土学会 ①下二一四川崎市多摩区東三田二―一―一専修大学文学部国文学研究室内
- 日本文芸研究会 ①下九八〇仙台市川内東北大学文学部内②十一月一〇日③東北大学文学部大講堂
- 俳文学会 ①下一五七世田谷区成城六―一―二〇成城大学文芸学部尾形研究室内②一〇月二七―二八日③東北歴史資料館
- 表現学会 ①下四八〇―一―一愛知県愛知郡長久手町愛知淑徳大学国文学科研究室内
- 仏教文学会 ①下一八三世田谷区駒沢一―二三駒沢大学文学部国文学研究室内(東部)下六〇三京都市北区紫野北花ノ坊町九六一仏教大学高橋貞一研究室内(西

- 部)
- 万葉学会 ①下五五吹田市千里山東三関西国文学研究室内
- ②一〇月二七―二九日③松山市立子規記念博物館講堂
- 美夫君志会 ①下四六六名古屋昭和田八事本町一〇一中京大学文学部国文学研究室内
- 和歌文学会 ①下一七一豊島区西池袋三―三四立教大学文学部日本文学研究室内②十一月一七―一九日③甲南女子大学
- 第八回国際日本文学研究会 ①下二四二品川区豊町一―一六一〇国文学研究資料館②十一月九―一〇日③国文学研究資料館

館報入手ご希望の方は
郵便番号、あて先、氏名を
明記のうえ、郵送料(切手)を
同封して当館情報室あてお申
し込み下さい。

国文学研究資料館報 第二十三号
昭和五十九年九月発行
編集・発行者
国文学研究資料館
東京都品川区豊町一―二六―一〇
郵便番号一四二
電話(七八五)七―三二(代)
印刷所 株式会社 三興